

集



俳句フォーラム

2018年7月 第68号

白山句会

神楽坂早春

田中藤穂

並木まだ芽吹かず雨の神楽坂
春雨の黒板塀の路地に入る
三月十日尾を削がれたる守護の虎
お地藏様おおう蕾の枝垂梅
耳の神は聖徳太子木の芽雨

こぼれそう

浦川哲子

メーブルから万朶の桜こぼれそう
地球儀の回転に厭き四月馬鹿
桜吹雪余命は誰も知らぬこと
風光る薩摩切子の紅と青
春の雪聞香という遊びあり

去年今年

平野無石

昭和遠し無口な母の寒卵
夕星や癌と向きあう去年今年
物干の影絵遊ぶや白障子
参道をゆく肩車初日影
俯瞰するビル百本の余寒かな

神楽坂

都築繁子

初夢や家族と行きし温泉をめぐる
春の雨黒板塀の艶めける
毘沙門天の阿吽の石虎四温かな
三神のおわす神域梅香る
紅梅や牛天神のねがい牛

春嵐

植木やす子

たもを手に落葉掬いて露天風呂
第九聴く今年も冬三日月を背に
春寒や狛犬番い子育て中
花街の石畳打つ春嵐
春雨や屋号行燈夜を待つ

春きざす

工藤はる子

かばの耳森の風聴く今朝の春
凍る夜やブーツの先で蹴飛ばす嘘
春きざす牛天神の牛の尻
潮招き鼓動の乱れ告げらるる
運動場肩を組む背に春の泥

牛天神

篠田純子

狛犬は今授乳中梅ふふむ
煉瓦塀のひとつ抜けいる春愁
崖上の天神目指す梅日和
団地餅つきゆげゆげ湯気的笑顔かな
もやもやと春芽の大樹赤鳥居

禍

大山夏子

ビルとビルの狭間の空に辛夷の芽
梅の花狛犬の仔が乳をのむ
石像にも戦禍遺りて春愁い
鳥曇高層階の玻璃汚れ
北窓を開ければ通る児らの声





泰山木

江口九星

愁いなき泰山木や春の空
梅開く暗き庭にも白濃くて
今年の計もう二月も過ぎにけり
大正モダンの大叔父の逝く冬銀河
寒柝のうつ後のしじまに足音も

名残り

若泉真樹

そこばくの哀しみ抱き寒牡丹
手になじむ貝殻拾う春隣
知られざる敗者の正義梅香る
真夜中の沈思の果てや春の霜
俯瞰する瀬も樹も尾根も名残り雪

薔薇

渡辺節子

薔薇一輪異人が呉れたバレンティン
山茶花の真紅迫り来鷲となり
芭蕉庵山茶花の香に母想う
沈丁花の香りほのかやわが書齋
凍てる街伏す浮浪者に毛布掛く

笑

大山夏子

幸せは笑顔えがおや初句会
寒明けの小雪新宿大通り
閉鎖中の通用門から梅香る
春満月闇をゆっくり押しひろげ
海を見て宿の朝餉の浅蜷汁

通信簿

中川のぼる

蠟梅の肅と咲き出す明りかな
下萌えや石が過重の日々在りき
春浅し昔むかしの通信簿
水温む流れ見つめる吾人あり
昼下がりの我も選定して迷う

早春

伊庸昌枝

冴ゆる夜の北斗に勇氣貫ひけり
起き伏しの変りなき今日寒卵
缶蹴りやぺんぺん草をよけて蹴る
春大根婆が背負へば風蒼し
しやぼん玉気ままに旅す大空へ

冬の鴉

楠本和弘

またしても心変わりや初時雨
酒交わす友の墓前や冬の鴉
赤光の汽笛よぎりし雪野かな
太平記読む春愁の喫茶店
信濃路や盆地の春を腑に落とす

棘

吉宇田麻衣

立春や気持ちの棘は抜けぬまま
手も足も大きく伸ばす春の宵
七日粥水を足しては蓋を開け
風花や葉に重なりて露天風呂
入彼岸開店を待つ和菓子店

肩越し

渡部恭子

肩越しに笑みし姿見春隣
一周忌の三寒四温通り過ぎ
冬満月光陰操る皆既食
輪郭はすぐ変化する春の雲
ミシンかけ憂いは消えて陽炎えり

じゃんけん

小沢えみ子

髪型を変えて今年の新たまる
目刺焼く今宵の肴はらからに
三極の花じゃんけんの真つ盛り
うらうらと春着を試着たわむれに
工事場のフェンスの童画卒業期

インカの香り

酒井たかお

共白髪妻に譲らむ初湯かな
豆撒きや逃げる鬼パパ見栄を切る
蓬餅かつて野に出て摘みしこと
花辛夷愁眉をひらくロダン像
馬鈴薯植ふふっとインカの香りして

円の会

鱈酒

石川りゅうし

鱈酒の熱きを含む妻恋うて
捨てられぬレコード重し年の暮
存えてかたじけなくも初日の出
小鳥来て落す佗助花むくろ
地下深きリニア工事山笑う

滲しみ

大山夏子

賀状来る写真に滲む月日かか
本棚の一冊抜いて余寒かな
春の雪露坐の大仏白き帽
三寒四温何着て行こう旅迫る
拘りは胸中のもの目刺焼く

指針

日置游魚

寒林を抜けてその先にある明日
裸木の矜持蒼天突き刺して
生きめやも見る聞く話す冬木の芽
叶えたき夢あとひとつ枯桜
人生に数多の指針凍て返る

しあわせな色

山田邦彦

しあわせな色をしている福寿草
大空へ晴れ晴れと咲く辛夷かな
春風をうけて翡翠の耳飾り
真っ青な空はぬくもり猫柳
見開ける仁王の視線白椿

落の臺

仁上博恵

暗澹を隈なく包む初明かり
露の臺記憶の切れ端ほろ苦く
手袋を外し五色の爪おどる
雛あられ亡母の歴史今にして
構内に並ぶ起重機春一番

寒卵

平野無石

抗癌の予後測りをり寒卵
風花や切通しゆく講の鈴
料亭の名はままごと屋梅匂う
地震超えし北の便りや木々芽吹く
残雪の峰反骨の兜太逝く

雀の子

重原爽美

雀の子転びよろけて育ちけり
転びては逃げ足早い雀の子
雀の子休みやすみの逃げるさま
庭石の固さが貌に四月来る
囀りのふくらんでいる森を聞く

旅立ち

小笠原妙子

底冷えの足もと昏い大落暉
腹たるむ老猫とゐて日向ぼこ
陽の当たる道を選びて春の水
春光を浴びて噴き出づ水模様
旅立ちや歌は弥生の風に乗る

夢

三羽永治

柚子を置く伝言メモに香の名残
太筆の届きし賀状「夢」一字
税申告算盤の指かじかみて
お内儀の炉端民話や秘湯の夜
噛み味にはまる目刺や杯重ね

真つ赤な新車

治部少輔

黄砂飛ぶ日和洗濯物たまる
佐保姫が来ているらしい富士の嶺
北条の定めも乗せて花筏
京想う御室桜のただ一本
青天に桜真つ赤な新車来る

優しき握手

中山未奈藻

猫の恋悔いも羞恥も無さそうな
幾度の優しき握手年暮れる
丸き背に病名告げらる雪降る日
子に託す思い変わらず去年今年
桜蕾む踊り出したる陽気かな